

この一冊に最初に出合ったのは小野惣平先生のお勧めによってであった。

小野先生には叱られましたが、たくさんのことを教えていただいた。日本刀についてもその一つで、未だに刀を手にするのが教えていただいたことが想い起こされてくる。

「日本刀は鉄の藝術だ。鉄を鍛えて、本来実用であるから折れ

ず、曲がらず、欠けず、

しかもこれだけ美しい姿に作り上げたのは、世界広しといえども日本だけである。鉄の表面を美しく仕上げて刃紋つける技術はまさに

## 四〇年ぶりの読書

### 本間順治著『日本刀』

鉄の藝術で、大英博物館に大切に収蔵されているのもその美しさの

故である」と教えてくださった。

さらに、「刀の本当の良さは、鞘さやをはらって、振ってみて初めてわかる」と言われ、ご所持の刀について、そうすることを勧めてください、軽過ぎてても過ぎてても腕や体に余分な力が入ってしまうこ

とを実感させていただいた。古今の名刀とは単に姿・形が美しいだけでなく、こうしたことを併せ持った刀であるろうと想像を逞たくましくしたものである。

さらに先生は、何事につけても本物を見るのが大切だと言われ、この本間順治著

『日本刀』を覚えてくださったのであった。

しかし若輩の私にはこの本は難しい部分の多い一冊であった。著者本間さんの刀に関する造詣の広さ、深さの故であったと今にして思う。したがってその後手にもすることもなく、入手したいと思いつつ

四〇年を経ていたが、「捨てないで!!」の活動に寄せられた一冊として著者の眼の前に現れたのである。

さて、一九〇四（明治三七）年、山形県生まれの本間順治さんについて。「本間様には及びもないが、せめて成りたや殿様に」と俚

謡にもある地区の名家・素封家、本間家の生まれであるという。

『朝日人物事典』（一九九〇刊）によると、日本刀研究家。國學院大学在学中から研鑽を積み、卒業後文部省に入省、刀剣調査に当たる。

戦後国立博物館（現東京国立博物館）調査課長として国宝や重要美術品の調査保存に従事。

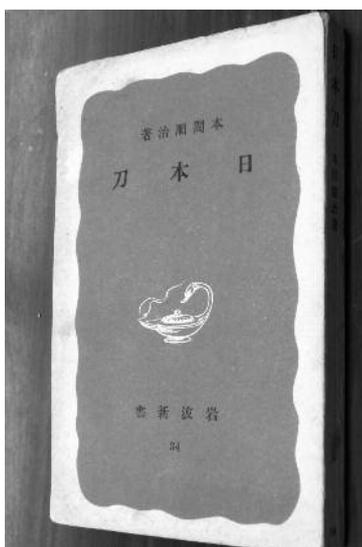
敗戦後、日本刀の製作・保存を禁止した連合国側と粘り強く交渉して、日本刀の芸術性を認めさせ、美術刀剣の保存を実現させた功績は大きい。日本刀剣保存協会初代会長。号 薫山。

戦後、連合国命による刀剣回収という出来事があった。第何次か

の「刀狩り」とも称されたが、刀剣を持つことを禁じ、所持者は地区の責任者に提出するようにというお達しで、筆者の家でも蔵の長持の中の刀を何本か届けたことを思い出す。

集めた日本国中の刀剣は靖国神社の境内に山と積まれ、燈油をかけて焼却したのだとも伝え聞いた。

本間さんが日本刀剣保存のためにどのような交渉をされたのか、そのあらましを知りたいとも思っているが、そうした資料はほとんど出て来ない。



本間順治著『日本刀』